



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

特集

## 企画展から見えるもの

vol. **35** | 季刊 **春**  
2015





特集 企画展から見えるもの

ライブミュージアムがいつも心がけるのは、その名のとおり「ライブ」感。建物も、その感触を、その空間を、五感で感じることを大切にしているし、展示についてもできる限り本物にこだわり、うなずいたり、考えたり、わくわくしてほしいと思っています。そこで今回は、好評のうちに終了した「土・どろんこ館」での企画展「雨と生きる住まい」の裏側をご紹介します。多くの人が、職人が、一つひとつの展示に真剣にかかわって作り上げました。その展示から見えてくるものは――。

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01 [特集] 企画展から見えるもの

LIVE REPORT

06 開催報告

企画展 雨と生きる住まい  
関連ワークショップ わらぶき帽子を作ろう

07 企画展 壁のパブリックアート

講演会 パブリックアートとしてのモザイク壁画

新常滑市民病院 エントランス壁画プロジェクト  
新市民病院で、いよいよ壁画(モザイクアート)施工

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

企画展 マカオのアズレージョ  
—ポルトガル生まれのタイルと石畳

常滑クラフトフェスタ2015

09 企画展 大地の赤—ベンガラ異空間

ゴールデンウィーク特別イベント  
みんなでシャボン玉を飛ばそう

CONTENTS

INAXライブミュージアム  
NEWS LETTER

vol.35 季刊 春  
2015

表紙写真

まだまだ寒い日が続くなか、ぽっかり訪れたぽかぽか陽気の一日。重い上着を脱いで、リラックスした様子で散策を楽しむ来館者の姿が見られました。(2015.3.8)

撮影：加藤弘一

常滑から\*

34

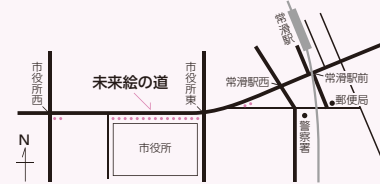
とこなめのガウディたち



昨年、約一年間にわたって小・中学生から大人たちまで、多くの市民の参加で進められていた常滑市制60周年特別記念事業「とこなめ未来絵プロジェクト」。「やきもの素材」を使って楽しく街を紹介しよう、市民数人によってスタートした「とこなめ未来絵ネットワーク」が中心になった手作りのプロジェクトです。タイルを愛したガウディのように、常滑の「大切なもの」文化、暮らし、伝統から未来へをモザイクタイルで未来に渡し、繋ごうと活動してきました。

その成果の立体オブジェ16点が、新しい名所スポットとして、市役所や大型商業施設、りんくうビーチへ向かう人たちの目を楽しませています。

デザイナーやアーティストが創作する作品とは一味違う、ほのぼのとした手作りの作品たち。「私たちも作ってみたい」と、手作りのモザイクアートが、他の地区でも広がっていることを期待させます。



\* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



土・どろんこ館の企画展示室につくられた2つの茅葺屋根。向かって左が真葺、右が逆葺。施工過程もDVDで見てもらう。

## 企画展の発想

### 土

火を得て形となり、火を通して焼き物になる。「火、水、土」はライブミュージアムの、そして毎回の企画展の根底にあるテーマだ。今回の題材は雨。「日本の建築は、雨がデザインしたのではないか。」そんな視点から、企画会議が始まった。

家屋で雨をしのぐのは屋根。その原点は草の屋根だ。日本の民家や神社に多く見られる茅葺の、あの細い藁や茅がどうして雨を防げるのか。

それは、植物の油分や繊維質が水をはじくからだ。屋根に降った雨粒は、表面張力も作用して、茎で編んだ屋根の表面をコロコロコロと流れていく。普段は見ることができない、屋根の上のそんな原理が目の前で見えたら楽しい。瓦屋根が雨を防いだ仕組みはどのようなものか。

展示室に実物大の屋根をつくらう。しかも職人がつくる本物の屋根を。そして雨を降らせよう。本物の雨を。それらは自ずと、何かを語ってくれるはずだ。

こう決まって、各担当者は走り出した。

## 雨音もライブで。

### 展示室に雨を降らせる

### シ

シャワーで雨を降らせるという発想は、早々に転換した。まず水量が違う。1時間10ミリの雨でも、シャワーの水量のわずかに100分の1だ。さらに、シャワーは連続の水流だが、雨は一粒一粒の水だった。「水流と水滴では、降っている時の音も違う。シャワーと雨は似て異なるものでした」と、スタッフの中斎。屋根に雨と同じ水滴を降らせるため専門家を訪ね歩き、自動車のワイパーの耐久性を測るためにフロントガラスに水を吹きつける専用ノズルを探し出した。

降らせた水をどうするか、湿気や臭いはどうするか。一つひとつ、問題をクリアしていく。「日本の一年間の天気を



ノズルの角度、水量ともに、日々微妙な調整をした。

## 土台を組む

見ると雨の日がだいたい3分の1、会場で雨を降らす頻度も同じくらいにしました」と、中斎のこだわり。いま思えば、土壁でできた土・どろんこ館に雨を降らすのは無謀だとはだれも考えなかったのだ。

### 企

画者の一人である編集者の坂井基樹さんは、建築家の安藤邦廣さんに土台と屋根の設計を依頼した。安藤先生は茅葺木造住宅を何棟も設計している第一人者。「展示室の設計図なんてすぐ書いていただけのつもりでしたが、展示室のサイズ、屋根に上る職人の数などを想定して何度も書き直していただいて恐縮しました」。こうして、茅葺屋根2棟、瓦葺屋根1棟の設計図が仕上がった。

設計図を受け取ったのは、板倉構法という木造の伝統構法で住宅をつくる建築家の東海林修さん。材料の準備から組み立てまでを担当した。現在、住宅の材料加工のほとんどはプレカット（工場での機械加工）だが、今回はすべての部材を手で加工する。東海林さんはあえて、若い一人の大工

## 茅葺職人の技

### 「茅

は、相当持つて行きま

した」と言うのは、はるばる京都美山からやってきた中野誠さん。伊勢神宮の式年遷宮にも携わった若き実力派の茅葺職人だ。美山は、多くの茅葺民家が残る集落。なかでも、中野さんの仕事場がある北村は、平成5年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された「美山かやぶきの里」。「茅葺の魅力を広く知ってもらえるなら」と、職人とともに駆けつけた。

今回つくるのは、真葺と逆葺の2つの茅葺屋根。作業は下地づくりから。太い竹を縦に、細い竹を横に渡し荒縄で固定したら、軒から茅をのせていく。

気を使ったのは、仕上げ。専用の道具を使って茅の先端を

### 真葺

茅の根元を下に向けて葺く方法。太く丈夫な根元が外にくるので長持ちするが、重ねていくと勾配がゆるくなり雨が漏りやすい。それを防ぐため捨茅を入れ、勾配を保ちながら葺く技術が必要になる。

### 逆葺

茅の穂先を下に向けて重ねていく方法。「苦葺」とも呼ばれ、万葉集にも詠われている。細く柔らかな穂先が垂れ下がって屋根を覆うので、雨が建物の中に入りにくく、薄く葺いても漏れにくいのが特徴。





防火性、耐雨性、耐久性に優れ、江戸中期から都市部で推奨された瓦葺。展示は庶民への普及に大きな役割を果たした「和型」。常滑市内にも多い。



「瓦職人は葺き始める前から「勝負」。図面を見て、届いた瓦の大きさを確認して、葺くイメージをつくる。しかし、ヤキものという特性から、瓦にも数ミリの誤差はつきもの。葺き始めと終わりをびったり収めたいという瓦職人の信条を全うする上で、この誤差をどう調整するかが腕の見せ所だ。「あれだけ目の前で見せるものなので、ちょっと緊張しました」と竹内さん。展示

の瓦屋根でも、瓦の若干の誤差をきれいに収め、職人として納得のいく施工をした。

**さ** ライブな展示が問いかけるもの  
 らさらと屋根を流れる雨の音が響く展示会場。心地よい音とともに、会場を訪れた人たちは、間近で大きな屋根を見つめた。

「建築をやっている者としては、手が届くような近さで屋根を見るなんてほとんどないから、ちょっと哲学的にな



った」と言うのは東海林さん。屋根なしでは成立しない「建築」。雨露をしのいでこそ、暮らしは始まり、豊かになった。だから改めて「展示を見ながら建築とは何かを考えた。それは本物の屋根だったからできたことです」。



**瓦** 下葺きの上に、土に薬を混ぜ込んで練った葺き土を乗せ、その上に瓦を載せる。一般的な切り妻屋根では、軒瓦、袖瓦を先に葺いてから、棧瓦を下から上に葺いていく。



**かや 茅** ススキ、ヨシなどイネ科の多年草の総称。今回は、逆葺で稲わら約30kg、真葦でススキ150kgのほか、稲わら、麻ガラ、杉皮など計200kgを使用した。

揃えた後、茅を刈り込んでいく作業だ。「やっぱり職人なんですね。外で屋根を見るのと違って、目の高さで見るでしょ。そこはきれいにやりたいんです」。約3日間をかけて、「いつも通りの作業」を終えた中野さん。目の高さと同じ位置に、迫力ある屋根が仕上がった。

## 雨をしのぐ 茅葺屋根の知恵

「こ」の展示のすごいところは雨を降らせたことで「すね」と中野さん。「茅は雨粒をポンと外に切る感じて出す。それには茅の葺き方が大事で、たった一本でも茅の向きが悪いと水が戻ってしまふ。ここでは茅葺屋根で雨がどう流れていくかを、ぜひ見てほしい」。



茅葺屋根の保存活動にも取り組み中野さん。都会から生まれ育った美山に戻り、紆余曲折を経て地元の職人に弟子入り。がむしゃらに技術を学び、20代の職人として注目を集めてから、すでに20年。中野さんの元では11人の若い茅葺職

人が育っている。「茅葺屋根は、日本の原風景をつくるもの。僕は、何が何でもこの技術を残さんかったら、あかんと思います」。その思いは、ますます強くなっている。

## 瓦職人の見せ場

**展** 示会場の入口に、堂々と構える瓦屋根を施工したのは、100年の歴史を持つ常滑の「屋根誠」。「昔ながらの工法でやりたいということ、うちが施工することになりました」と言うのは、4代目の竹内寅規さん。「昔



茅葺屋根の裏側を間近で見てもらうのも今回のポイント。「少しでも美しく」と、職人も特に気を使ったところだ。

「日本建築には、日本特有の雨と湿気をしのぐ住まいの知恵が詰まっている。それは、日本人が長い歴史の中で獲得してきたもの。これからの住まいでも、考え方は活かせるのでは」と言うのは坂井さん。古くからの日本の知恵と、現代の建築と暮らし。そこに欠けているものは何か——今回の展示は、そんな問いを投げかけたのではないのか。

ライブな企画展示はいつもスタッフの当初の思いを超え、新しい発見と、その向こうにある貴重な風景を見せてくれる。

